

共同体主義か、ムスリム・ミドルクラスの現れか？

フランスにおけるムスリム私立学校の発展に関する教育エスノグラフィ

フランス国立社会科学高等研究院 山本繭子

1. 目的

本報告では、近年「フランスにおけるイスラム」をめぐる議論の中でもとりわけ高い関心を呼んでいる、ムスリム私立学校 (ecole Prive Musulmane、以下 EPM) を取りあげながら、その発展要因の分析を目的とする。フランスでは、ムスリムの宗教的規範に基づく公共の場での可視性が、度々議論を呼んできた。その中でも最も象徴的なのが、「学校」空間での「(イスラムの) スカーフ」着用に関する議論である。1989 年に端を発した「スカーフ論争」は、2004 年に公立学校での宗教的標章の着用を禁止する法律が成立したことにより議論の沈静化が見られた。しかしながら、今ムスリム「私」立学校の出現により、「学校」空間における「イスラム」の位置が再び注目を集めている。EPM とは、公立学校と同様の国民教育プログラムを実践すると同時に、イスラム的価値観に基づく特殊教科 (アラビア語、イスラム的倫理、コーラン等) を提供する学校を指す。こうしたイスラム教育は、従来コーラン学校やムスリム系アソシアションにて実践されてきた。その一方、2001 年に最初の学校が設立されて以降、EPM は急成長を遂げており、その数は現在仏全土で 50 校を数える。ではなぜ今 EPM という新たな形態の学校が生まれ、急速な発展を遂げているのか。それは、2004 年法を受けた結果の共同体主義の現れなのだろうか。

2. 方法

本調査では、社会学的エスノグラフィの手法に基づき、学校空間における参与観察および、空間を構成する諸アクターとの半構造化インタビュー / 自由対話を行った。またフィールドとしては、とりわけ国との関係性が強い「契約校」に焦点を当てつつ、中でも北マルセイユの「イブン・ハルドゥーン中学・高校」およびリールの「アヴェロエス高校」をケーススタディとして採用した。

3. 結果

まず EPM の多くが入学にあたり非常に高い競争率を有することが判明した。アクターの EPM 選択の理由としては、「宗教」的理由をあげるグループが一定数存在するものの、一方で「よりよい教育の質」を挙げるグループが同等以上に存在することがわかった。また、イスラムに由来する規律 (日中の祈り、宗教的標章の着用、空間の性別別分離等) は校則として定められておらず、EPM では「宗教」(イスラム) を自律的に参照する自由の存在が認められた。

4. 結論

EPM の発展は、ムスリム市民からの強い需要を背景としている。しかしながら、それは「共同体主義」という消極的かつ一元的な要因に還元されるものではない。アクターが EPM に求める「教育の質」と「宗教的環境」とは、フランス市民として最良の教育を追求すると同時にムスリムとしての文化遺産・宗教的アイデンティティを積極的に肯定しようとする、「ムスリム・ミドルクラス」という新たなフランス人ムスリム像の現れと翻訳することができるだろう。

追記：本報告は、2017 年に EHESS に提出された修士論文『Former un bon citoyen musulman ? : Du developpement des ecoles prives musulmanes en France. L'étude de cas du collège lyc?e Ibn Khaldoun』での調査および、仏内務省・中央宗教局管轄調査プロジェクト「Faire r?f?rence ? l'islam au quotidien」内部で行われた調査結果に基づく。